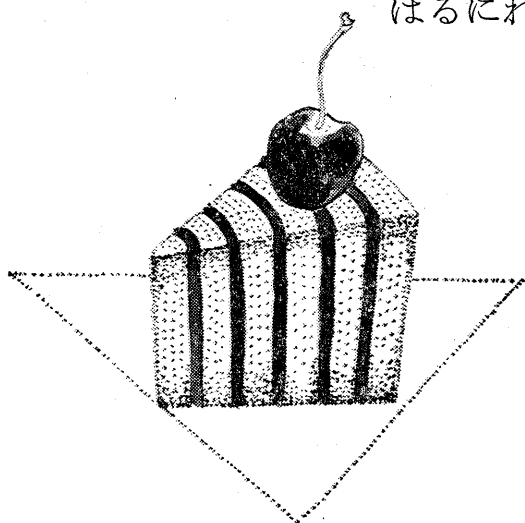


若いお母さんたちへ

不便のすすめ

はるにれの会 山本直子



私の友人は、千葉県で高校の教師となり六年目である。仕事ができ、生徒たちからも慕われていた。「いた」と言うのは、最近、妙に元気がない。先日も電話で「私、仕事やめたいなあと思うの。たとえばね、今、うちの生徒がタクシー通学やつてるの。タクシーよ、タクシー。タクシーって、なかなか乗れるものじゃないじゃない。」まどろっこしそうに言う、その言葉の裏は、同じ世代に育った私にはよくわかる。真夏の炎天下、私の母は祖母からもらったじやがいもや玉ねぎを背負い、私と弟を連れてよく歩いた。「水が飲みたいよ。バスに乗ろうよ。」とぐずる私たちに、「がまんしなさい。もうすぐだからね。」という母の声。「どうし

て、どうして」を心の中でくりかえしながら、やっとたどりついて飲んだ水のおいしかったこと。母への恨みも何もかもふっとんで、「やった」という気分になったものだ。タクシーなんて、とんでもない。

「それでね」と、友人の話は続く。「私が注意したの。そしたらね、『五人で乗れば、バスより安あがりだ。どうしてタクシーがいけないんだよ。』って言うのよ。そこには、お金の問題じゃない何かがあると思わない？」と思う、思うと言いながら、その後も教育についての話は、疲れを知らない。なんでも、タクシーで帰るのは、文化部、運動部、男女など全然関係ないそうで、校門の前に客待ちをするタクシーが並ぶそうなのである。しかも、それがこの高校だけでなく、どこの高校でもそうで、「タクシー通学をしない」という校則まで出来ている高校野球出場校もあるそうである。

一時間ほど怒りをぶつけ合ったあと、一人になって冷静に考えてみると、私たち大人もずいぶんと同じような考え方をしているのではなからうかと思えてきた。

たとえば、私の同僚（実は、私は小学校の教員をやっている）は、私と同じく子育てをしながら仕事をしているのだが、紙おむつを使っているのだそうである。彼女曰く、「おむつを洗う時間を休養に回した方が合理的だって、主人も言うのよ。だからもったいないけど使っているの」

また、ちまたにたくさんあるハンバーガーショップなども、紙コップ、紙の入れ物などがおそろしくなるほど使われている。そしてそれはみんな使い捨てである。貧乏性の私などは、捨てる時、心のすみがチクッと痛む。おそらく、皿を洗う「人件費」より「紙コップ代」が安いのだろう。

そうだ、ここには、みんな同じ考え方があつた。労働力をお金に換算して、値段で価値を比べるやり方である。それは数字として目の前につきつけられるだけに、妙に納得できてしまう。

学生時代、ある先生から、「学校給食を無理に食べさ

せると、登校拒否がおこったりする。無理に食べさせなくても、同じ栄養素がとれる物をうちで食べさせればいいのだから」という話を聞いた事がある。その時は、私も「そうだ、たかが給食じゃないか」と思ったものである。そこで私は「半分は食べようね。始めから食べられないとわかっていいる人は、半分だけ食缶へもどしなさい」と指導してきた。ところが今年は、「いただきます。」をするやいなや、きらいな物を半分もどす子たちで、食缶の前は長蛇の列である。「以前に担任した子たちは、こんなに残さなかったのにな」と思いながら、その子たちの顔を見ると、全員が全員、ふだんからたいへんわがままな子たちである。そばに行ってみると、まぜごはんの中のグリーンピースだけ取ろうとしている子、汁の中のしいただけがいやな子、野菜はみんないやな子など、「まったく誰のおかげでごはんを食べさせてもらっているの?」と嫌味の一つも言いたくなるわがままぶりである。そして、何をかくそう、このクラスは学校一の個性豊かな(?)クラスと言われるほど、将来のあやぶま

れる子の多いクラスである。

そして、おもしろいことに、その子たちのみんながみんな、自分の持ち物さえ片付けられない。子どもたちが帰ったあと、落とし物を拾って回ると、大きなダンボール一箱になる。翌朝、子どもたちにわたしながら、「自分の物は大切にしようね。」と言うと、「だって、これ、わたしが落としたくないもん。○○ちゃんだよ」などと言う。「自分の物でしょ?」と言うと、「うん、でも、無くなったら、また買ってもらえるもん」私は、あいた口がふさがらない。わがクラスの落とし物箱も、学校の落とし物箱も、いやになるほどの落とし物でひしめいている。真新しいぼうし、ジャンパー、体育着、かさ…。なくなったら、すぐにでもわかりそうな物まで、引きとり手を待っている。ところが調査をしても、全員ぼうしをかぶって来ているから不思議である。そして、その子たちの口ぐせは、「めんどくさい」「寒い」「いやだなあ」である。

子どもたちをそんなふうにながまま、無気力にさせて

いるのは、いったいどんな力なのだろう。

先日、私の学校で、給食試食会が一年生の保護者を対象に行われた。みなさん「おいしい、おいしい」と言ってお帰られたそうである。その時に感想を書いてもらったのだが、こういう意見がぼつりぼつりと見られた。

。一般的に子どもが嫌いな食べ物を給食に使ってほしい。

。家では、野菜を取り入れた献立の時など、ほとんど手をつけないが、給食では思ったよりよく食べていました。一日に一食でもバランスよく食事ができるのがよいと思う。

。家では、手間のかかる料理をしないので、給食に期待します。魚や野菜など使ったものをお願いします。

みなさんは、どう思われるだろうか。私などは、「いたい誰の子なんだろう」と首をかしげることしばしばであった。

また、ある日思いたって、子どもたちに聞いてみた。「毎日、アイスクリームやジュースを必ず口に入れてい

る人？」38人中14人の手が上がった。またまた同じメンバーである。中でも、相手かまわず暴力をふるうA君は、毎日アイスクリームを二本、真冬でも欠かさないそうである。

教育問題がクローズアップされている中、私たち親は子どもたちに何をしなくてはいけないのだろうか。もしかしたら、何も特別な事をする必要がないのではないか。あたりまえに食事を作り、洗たくそうじをし、悪い事をしてはいけないと教えていけば、子どもはまっとうに育っていくのではないかと、最近思うようになった。

そのままでは食べられない物を、切って、いためて、煮て食べ物を作り、お皿を洗い、次のための準備をする。汚れ物を洗たくし、干して、たたんで、タンスにしまう。買い物に行く時は、歩いて行き、野菜のつまった重い袋を「ああ重い」などと言って持って帰ってくる。子どもが同じ事をして、根気よく「悪いんだ」と教えていく。そういう一つ一つの積み重ねが、子どもの生活

感覚を自然に作り、参加させることによってがまんする心が育ち、大げさに言えば、親の人生観や生き方が伝えられるのではないか。なぜなら、それらは生きる事そのものなのだから……。

しかし、今は、家事を軽視する方向に進んでいる。また、時間や心さえも、お金で買う時代である。物が無くなったら、探す時間よりも、買ってきてその分「時間」や「心」を使った方がいいと考える人も多い。子どもが消しゴムをなくした時、「子どもの困った顔」「お小言を言うこと」「根気よく探させること」というのもろもろの雑事をしよこむよりは、新しい物を買って与えて、「しようがないわね。今度は大事に使うのよ。物は大事にしないで、親がらくをする分、子どももらくなのである。物を大事にしようなどという心が育とうはずがない。

今は、細かい事をいちいち言う事が、はやらない時代である。「人間は、大きくかまえよ。小さい事を言うのは、暗い」などと、バカにされる時代である。しかし、

その細かいつま重ね以外に、今の教育の何を変えていけるだろう。

きらいな物もまめに食卓に登場させ、しかりながらでも少しずつ食べさせていく。それは、その物が食べられるようになったということにとどまらない。いやな事からにげ出さない力、にげ出さないでよかったという気持ち、今度は自分から食べてみようという気持ち、そして、さまざまな味や歯ごたえや舌ざわりを感じ、本当に人間味のある人になっていくのではないか。

なくした消しゴムを、しかりはげましながら探すこと。その事以外に、物を大切にしている心が育つとは思えない。

歩いて行くことによって、足腰が強くなることだけではなく、自然によるさまざまな変化や人々の生活が、何もしなくても見えてくる。自然に体があたたまり、冬でもちっとも寒くない。自転車や、ましてタクシーで、そんな喜びを感じることができるようか。

昔は、と言ってもほんの二十年前までは、こんな事は

みんなあたりまえの事だった。インスタント食品もおそろがい屋さんも今よりずっと少なく、弁当屋さんなどは駅でしか見なかった。そして、世の中全体が今ほど豊かではなく、簡単に物など買ってもらえない時代だった。自転車だって、家に何台もなかったから、歩いて買い物に行ったり遊びに行ったりした。自然に近所の犬や赤ちゃんと仲良くなったり、秘密の近道を見つけたりした。今は、歩いている子をあまり見ない。幼い子はみんな自転車に乗せられ、ビューンと通っていく。あれでは寒く

て、外がいやになるだろうないつも見ている。何もかもが便利になり、人間の力をあまり必要としなくなった。しかし、子育てには便利がない。便利を享受してしまう分、子どもの中に育たない部分が出てくるのだから……。

ですから、私はぜひ、みなさんに不便のすすめをしたいと思う。わざわざ不便をしなくてはいけない時代なのだ。幼い頃から、子どもをその不便に参加させてほしい。



わが家の一歳十ヶ月の娘は、この不便な生活がお気に入りである。わが家には、自転車がない。買い物に行くのにも、往復一・五㎞ぐらいは歩いてしまう。途中、より道もあって、二時間かかることはさらであるが、犬と顔なじみになり、出会う人に「こんにちは」を言い、ころんで起き上がり、水たまりに入ると言って泣く。スーパーでは、自動ドアをしめようとがんばり、「お店の物はさわっちゃだめ」としかられて泣いたあと、「これは、お魚」「これは、ほうれん草」と説明してくれる。買った物の袋、つめを手伝ってくれ、まっ暗になった中を月や星を見ながら歌を歌って帰る。二時間の買い物は、この子の人生の凝縮ではないかと、ふっと感じる。泣いて笑って驚いて喜んで、そしてさまざまな人との出会いもある。しつけをする機会もたくさんある。三日に一度は熱を出していたわが子は、寒風の中を二時間歩いても平気になった。自然は、本当に生きる力を与えてくれるんだなあと感じる。子どもだけでなく、親にも子育てへの自信を与えてくれる。

しかし、こうなるまでには、親にも我慢が必要だった。より道をしたたり、時間がかかったりして、最初はベビーカーに乗せようと思った。でも、この子はベビーカーをいやがり、おして歩いた。一歳三ヶ月の頃だ。真夏の日ざしの中、「はやく帰らないとお肉が腐っちゃう。」と思いながら、じっとがまんした。「ニューニュー」と牛乳をほしがったが、「うちまでがまんしようね。」と歩き通した。スーパーマーケットでも、もちろんあの子ともいすのついたカゴに乗ってくれない。店内を追いかけ回す毎日だった。二、三週間後には、追いかけて回さずにくすむようになり、半年後の今は、「お母さん、お店の物をさわっちゃだめよ。見るだけよ」と、逆に注意されるほどになった。

私だって、もしこの子がベビーカーやスーパーマーケットのイスに乗っていてくれたらこんな我慢ができなかったかもしれない。たまに泣いたら、悪いと思っておかしを与えて黙らせていたかもしれないと思う。しかしそれもよく考えたら、親の我慢と根気を、おかしという

お金で買うことになっていたのではないだろうかと思うと、おそろしくなる。私は、わが子に救われた思いがする。親が根負けをして、しつげのかわりにお金を与えていれば、どうなっただろう。

私たち親は、もっともつと根気よくがんばらなければならぬのではないか。お金や便利さとひきかえにしてはいけないのではないか。もっと大きくなったら自然にわかるのだからというのは幻想である。今の中学生を見たら、よくわかる。しかしなにも、やみくもに厳しくしろと言うのではない。ただゆずれないところは、絶対にはがらばるべきだと思う。子育ての大変なところは、その根気比べである。けれども、大変だからこそ、喜びも大きいし、親を親にしてくれるところではないかと感じる。

一歳十ヶ月のわが家の娘は、洗たく物をたたみ、タンズにしまってくれる。「これはお父さんの」「これはお母さんの」と、下着までよく見ていることに驚かされる。

これは決してお手伝いという名前ではよべない。完全に

生活への参加である。生活の喜び、生きていく喜びは、何もしなくても静かに伝わっていく。その静かな伝わりこそが、生きる意味を考えることへつながっていくのではないか。

